

倉田容子著 『テロルの女たち』

日本近代文学における政治とジェンダー』

岡田豊

「序章 公／私区分とジェンダー」において、「女性と政治の関係は、なぜこんなにもよそよそしいのだろうか」という問題提起がなされ、「本書は、政治と女性の関係を問い直す試みであると同時に、〈革命／恐怖の女〉の系譜を照らし出す試みでもある」と明記されている。本書を貫くテーマは、このようにわかりやすく説明されている。「何が政治的問題として扱われ、何がそうでなかったのか、その線引きに関連する言説や表象を問い直すことを試みたい」とあり、文学と政治との接続の際に慎重な手続きを心がけている。その姿勢が、「理想の政治」の範囲、すなわち何が「公共の利益」に関わる問題と見なされ、何が「公共の利益」たり得ない「私的な利益」の追求と見なされてきたのか、そもそも「公共」という概念にはどのような前提が含まれているのか、そして、こうした公私二元論に対して文学は何を語ってきたのか」という問題意識を生み出しているのだろう。著者が述べている通り、「公／私区分」をめぐる問題系は、「その時々々の歴史的文脈」との関係性によって、鮮やかに照らし出されている。詳細な文献調査と丁寧な読解分析によって練り上げられた数多くの斬新な論考が、この一冊の中に収まっているのである。

本書は、三部構成となっている。まず、「Ⅰ 自由と女——宮崎夢柳の政治小説」では、文学史の参考書を通して知っている夢柳の政治小説を、改めてジェンダーの視点から問い直している。例えば、『芒の一と叢』について、「苛烈な死を遂げる「佳人」の表象」の分析が「歴史的文脈」の中で行われていく。そして、先行研究では見落とされてきた「前近代的な文学的修辭と近代的プロットのあわいにおいて苛烈な女性表象が生み出された理由」を考察している。文字の造形の分析では、勤王文学の系譜上に位置づけ直し、「貞女」「孝女」像の排除と攘夷思想の後退の意味するものについて、考察を深めている。第二章と第三章では、ここでの「佳人」の表象が「歴史的文脈」の中でさらに問い直され、「自由民権論における公／私区分の再編」などの問題点と接続されて、検証が加えられていく。「佳人」の死が男性同志たちの手に「自由」の概念を奪還すべく要請されたのではないか、「苛烈な死を遂げる「佳人」は、〈公〉からの女性の排除を象徴する表象であったと言えるのではないか」といった問題の提起は、文学史の再検討を鋭く促すものだと言える。

「Ⅱ 階級と女——福田英子と平林たい子」では、第Ⅰ部で論じられた「公／私区分」に対する女性活動家からの異議申し立てを多角的に考察している。先行研究を丁寧に整理した上で、「〈公〉と〈私〉」が複雑に絡み合う『妾の半生涯』の語りの性質について、改めて問い直していく。そして、「語りの戦略性を対象化する文学研究の視座を踏襲しつつも」、明治社会主義の文脈に位置づけ直す作業を通して、男性社会主義者たちとの差異に注目し、「〈私〉」の体験を〈公〉へと開いてゆく独自の論理」を指摘している。「〈私〉」語りを出発点としつつ女性の抱える諸問題を〈公〉へと接続する英子のレトリック」を明らかにした上で、「英子のテクストには、女性抑圧の根幹に公私二元論が横たわっているという認識が確かに底流している」と論じた点は、筆者にとっても参考になった。安易に論理性の欠

落という否定的な評価を下すのではなく、むしろそのように見えてしまう点が何によるのかを問題化する手法は、本書のいたるところに見受けられ、鮮やかだと思わせる箇所である。そういう手堅い論証によって、「女性の政治活動や思想が「公共の利益」に関わるものと見なされにくい傾向」を確認した後、平林たい子の戦前のテクストが論じられる。「〈公〉から排除されていた女性解放の問題を政治的課題に組み込もうとする努力が、具体的かつ集団的になされた時代」という見解とともに、「公／私区分に対する意義申し立て」の独自性を論じていく。「たい子の言語化＝分節化への情熱は、固定された認識に揺さぶりをかけ、共通善の更新を迫る、「理知」と「意志」のフェミニズムと言えるだろう」という見解は、従来のプロレタリア文学批評を相対化する重要な指摘であろう。ここまで読んでくると、「公／私区分と女性の課題との関係性を問い直す」本書の試みが、政治をめぐる文学テクストをジェンダーの視点から分析する意義や今後の課題、文学史研究の見直しなど、多くの可能性を提示していることに気づかされるはずである。

「Ⅲ 文化と女——三枝和子のフェミニズム・デイストピア」では、一九八〇年代の三枝和子の小説を取り上げ、「同時代の日本のフェミニズムの思想的傾向の中でどのような位置を占めていたのか見定めるとともに、そのフェミニズムの今日的意義」を追求している。「女性原理」を根源的に排除した「文化」への抗いや、自立的主体の観念への懐疑とそれに対する小説における批評性など、意義深い考察と言える。「終章 テロルの女たち」で、著者は全体をもう一度振り返りながら、「文学史に時折姿をあらわす不穏な〈テロルの女〉たちは、自明の前提として見過ごしてしまいがちな観念を思考の俎上に載せる糸口を与えてくれるだろう」と結んでいる。本書が提起した問題を私たちも引き受け、それらに立ち向かっていくために必要な思考力を鍛えなければならぬ。そんな思いを抱かせる、読み応えのある一冊である。